

鯉淵学園の思い出

鯉淵学園の思い出を加藤 整さん(10期生)に引き続き執筆を依頼いたしました。今回は藤岡孟彦先生と石橋幸雄先生のことを書いていただきました。

「藤岡・石橋先生のこと」

藤岡孟彦先生は昭和2(1927)年から同21(1946)年まで約20年間、兵庫県農業試験場で農作物病害の研究及び防除対策の指導に当たっておられました。鯉淵学園に赴任されたのは昭和23(1948)年で、植物病理学(作物保護)を中心に生物学や植物生理学の講義(10期生 加藤 整)を担当されました。一般には「植物病理学」と呼ばれているものを「作物保護」とされたのは藤岡先生でした。これは、われわれに必要なのは、作物を病害虫からどう保護していくのかということにあるという考え方からであったと聞いています。藤岡先生の講義は誠に淡々としたものでしたが、後でノートを読んでもと実に体系だったものであったことを痛感させられたものです。



藤岡先生は明治25(1892)年東京の生まれ、旧制一高から東京帝国大学農科大学に進まれ、植物病理学を専攻されています。先生のご父君は、東京上野公園の西郷隆盛像や皇居前広場の楠正成の銅像の制作者として有名な彫刻家・高村光雲であり、同じく彫刻家でもあり詩人でもあった高村光太郎や、鑄金の高村豊周は藤岡先生の実兄に当たります。なお、高村豊周氏は小出満二先生の胸像を製作されており、現在は鯉淵学園図書館に所蔵展示されています。

藤岡先生は教室での講義にとどまらず、夜の読書会などにも必ず出席されて学生の指導に当たられました。ご息子の貞彦氏(一橋大学名誉教授)は、「(読書会の)夜帰宅しては楽しげにその夕べの一座のエピソードを語るのを、子供心に楽しみに聞いたものです」と語っておられます。

先生は昭和45(1970)年に、奥様や貞彦氏とともに明石を訪ねられたことがありました。このとき、加藤信二氏(5期)や山下優勝氏(同)等数名の同窓生で農業試験場(明石)をご案内したのですが、先生が在職中に使っておられた研究室などもまだそのまま残っていて、感慨深くご覧になっていました。藤岡先生は単に一人の植物病理学者にとどまらず、すぐれた文化人でありました。

さて、鯉淵学園では、2年生になると自分でテーマを決めて勉強する「特別研究」(特研)の制度があり

ました。私は藤岡先生の「作物保護」にするか、石橋幸雄先生の「農業経営」にするか悩みましたが、結局「農業経営」にしました。それは、農業を経営経済的側面から勉強する必要性を感じていたからです。私は農林省の農家経済調査の数字をもとに、「農業粗収益及び家計費中に於ける自給生産物の意義」を明らかにすることを課題としました。これは、当時のわが国の家族労作経営のもとでは、その自給生産物が農家の強み(家計側面)ともなり、弱み(経営側面)ともなっていることを明らかにすることにありました。

石橋幸雄先生は明治38(1905)年福岡県の生まれ、鹿児島高等農林を卒業後帝国農会に入られ、調査部長を務められています。当時出版された『農業適正規模』(昭和18年)は特に評価の高い著作でした。先生は昭和21年(1946)年に高等農事講習所(鯉淵学園)創立と同時に全国農業会から移られ、同48(1973)年に定年退職されるまで、27年間にわたって学生の教育と学園運営の要職を務められました。

この間、昭和28(1953)年に『農業経営講話』を出版され、同36(1961)年には『農業生産費計算—その改革と進展』によって、東京農大より農学博士の学位を受けておられます。

私は石橋先生から「農業経営学」と「農業簿記論」の講義を受けました。先生の講義は学生に丹念にノートをとらせ、それを詳細に解説するという極めてオーソドックスなものでした。その基本となったのが先の『農業経営講話』だったと思います。この本の「はしがき」で先生は、「本書は農家の経営者能力の涵養と向上を中心において書いた」と記されています。私は、これは東畑精一先生の「経済主体性論」や鞍田純先生の「農業近代化の主体としての農民」の養成につながるものがあるように感じます。いずれも人間たる「農民」に焦点がおかれていることで、「ヒューマニティにもとづく広い視野にたった農村指導者の養成」という鯉淵学園の教育の基本がここにあったことを痛感させられます。と同時に、今の学園の教育がいささか技術論に傾斜し過ぎているところがないか。時代が変わったとはいえ「人づくり」は技術(知識)だけではない、と私は考えるのですがどうでしょうか。



頑張っています！同窓生

今回の「頑張っています！同窓生」は、栗山 要さん（1期生）、奥田和夫さん（10期生）、長尾輝夫さん（24期生）を取材しました。

「日本人本来の心を伝えたい」



カフェでの栗山 要さん

10月17日、神戸市営地下鉄西神南駅近くのカフェで栗山 要（1期生）さん取材しました。23年10月に開催した「鯉淵学園同窓会近畿のつどい」で講演していただいてから、ちょうど2年ぶりの再会で、9月19日に米寿（88歳）を迎えられた年齢とはとても見えないほど元気そうでした。

栗山さんは、満蒙開拓指導員養成所に昭和18年に入学し、戦時中の混乱期に3年間の学生生活を送られ、その後閉所となった養成所を引き継いだ全国農業会高等農事講習所（鯉淵学園の前身）の1期生として卒業されました。昭和20年4月に召集令状を受け岡山連隊に入営、同年8月の終戦で除隊されました。戦後は広島管区気象台産業気象研究所の研究者として2年間、産業気象の仕事に従事されました。昭和23年から兵庫県庁で4Hクラブの指導、農業振興協会事務局局長を経て、昭和45年から有限会社日本講演会で編集長・代表取締役を務め、旬刊誌を編集して官公庁、学校などに配布されました。

平成21年に日本講演会を退職されたあとは、フリージャーナリストとして活躍、満蒙開拓指導員養成所時代の恩師である（故）阿部國治先生の文献を編集し、『新釈古事記伝』（全7集）を刊行されました。栗山さんがこの『新釈古事記伝』を作成されたきっかけは、「阪神・淡路大震災」で住んでいたマンションが取り壊しとなり、見知らぬボランティアの方々から食料品や衣服等を無料でいただいたことでした。このボランティアの厚意は、まさに《袋背負いの心》の現れであり、このとき栗山さんの胸中に「人間として一番尊い仕事は他人さまの苦勞を背負ってあげることだ」という阿部先生の言葉が甦り、これを機に阿部先生が遺された資料を基に『新釈古事記伝』の編纂に取り組みました。

この『新釈古事記伝』は有名企業が社員向けの研修教材として活用し、また月刊誌『致知』が特集として掲載しているなど、日本人の心の原点をあらわす書物として評価されています。今もフリージャーナリストとして詩誌『メランジュ』同人、『神戸木鶏クラブ』同人として執筆活動に勤しむ傍ら、ライフワークとして日本人が本来持っている心《袋背負いの心》を人々に伝える活動を続けておられます。

学生生活の思い出は、「何と云っても、広大な松林・クヌギ林の中の寮生活とそれに1か月から3か月に及ぶ関東地方、東北地方での所外訓練であった。極めつけは1か月に及んだ北海道一周の大規模農業体験であった」と当時ことを懐かしく話されました。「それにも増して、人生の糧となったのは、良き教師、良き盟友に巡り会えたことだが、その多くは既にあの世の人となってしまったのは悲しい」と亡き恩師や友を偲び話されました。

趣味は、読書とパソコンで囲碁をすることと、5年前から春夏秋冬を問わず、自宅を早朝5時に出て1時間ほどかけて5kmの道を歩くことを日課にしておられます。そして、パソコンで日記を6年間書き続けておられます。

最後に、同窓会の後輩に一言をお願いすると、栗山さんが生涯の宝として大切にしておられる書である《切散八侯遠呂智》（きりはなつやまたのおろち）と《負袋為従者率往》（ふくろをせおいともびととなりていきき）を引用し、「権力を求める生き方よりも、人の心の叫びが理解できて、その人を支えるような生き方をしてほしい」と話されました。

栗山さんの興味深い話を聞き、聖典『古事記』の世界を学んだ約1時間半の取材でした。栗山先輩、これからもお元気でお過ごしください。

「趣味の果樹栽培が一つの生きがい」



果樹園での奥田和夫さん

台風が過ぎ去り雲ひとつない秋晴れの9月17日に、豊岡市竹野町松本にお住まいの奥田和夫（10期生）さん取材しました。奥田さんから「取材には奥さんを連れてきなさい」というお言葉に甘えて、女房と一緒に自宅にお伺いすると玄関先で出迎えていただき

ました。早速、200 年離れた山裾にある 800 m²の果樹園に行くとぶどうの甘い香りが漂っていました。果樹園内のテーブルには、この日のために収穫した「ぶどう、りんご、梨」が盛られており、これを美味しく戴きながら、丹誠込めて栽培された果樹の話聞かせていただきました。「竹野という土地は、サクランボ以外は何でも栽培でき、今では花の咲く順に興味として 13 種類の果樹を作っている」という話を聞き、私は「この地域で四季折々の果樹が本当に栽培できるのか」と正直驚きました。しかし、この地域での果樹栽培は誰にでもできたことでなく、奥田さんが土壌、気候、降水量、日照時間などを長年研究し、辿り着いた成果であるということが分かりました。今では、果樹栽培の先生として地域の農家に栽培方法を教えられているそうです。

趣味であり生きがいのひとつである果樹栽培は、市場や農産物直売所への出荷は一切なく、収穫した果物は地元の人たちにお裾分けをしたり、知人や地域の人たちに果樹園を開放してぶどう狩り、梨狩り、りんご狩りなどで「おもてなし」をしたりして地域社会に貢献されておられます。果樹栽培を始められて 20 数年が経過するそうですが、趣味として楽しく自分のペースで果樹を栽培することが長続きできるコツだと話されています。果樹園のほかに水田が 60 アールありますが、水管理と畦の草刈りだけを行い、あとは作業委託に出しているとのこと。

奥田さんは、昭和 30 年の 3 月に鯉淵学園農業科（専攻：農業経営）を卒業し、翌 4 月に地元竹野町農業共済組合に就職されました。その後昭和 42 年竹野町役場に編入し、平成 7 年 3 月の定年退職まで 40 年間公務員として活躍されました。平成元年から 10 年間、ふるさと創生協会の理事として、公共施設に各種花の樹木を植栽する事業に奉仕されました。平成 11 年から「たじま農協」理事として 3 期 9 年、平成 13 年から竹野町農業委員と会長職を 3 年間務められました。また、地元区長を 15 年間就任し県知事から表彰を受けられました。なお、取材当日、奥様はお留守で残念ながらお会いすることができなかったのですが、同学園を卒業（14 期生）された同窓生であります。

趣味は旅行と読書。国内では山形県、埼玉県以外の全ての都道府県に 1 泊以上の旅行で訪れており、また平成 7 年からほぼ毎年のように海外を旅行し、行き先も 15 カ国を数え、今年のアメロカハワイ旅行で最後にしたいとのこと。旅行先の思い出として旅行記を作成されていることは、旅行好きの私たち夫婦にとっても参考になりました。もう一つの趣味の読書は、歴史やエッセーが好きで応接間の大きな書棚ケースを拝見するとぎっしりと本が並んでいました。特に目についたのが宗教に関する本の多さであります。宗教についてお聞きすると、神社・仏閣の歴史を詳しく解説され、「神社・仏閣は宗教といえども文化である。文化は時とともに変遷する。今後、人口減少・過疎化が一層進むなかで、寺院の運営は壇家がその責任を負わ

なければならぬ。私は壇家の経済的負担の重みを軽減するために地元の寺院を改革していきたい」とその思いを熱く語っていただきました。

最後に同窓生（後輩諸君）に一言をお願いしますと、「視野を広く持って物事に対処していただきたい。但馬に來られた時には、私の果樹園にぜひお立ち寄りください」というお言葉が返ってきました。奥田さんと別れたあと、帰路の車中、取材助手の女房が「奥田さんって、70 代後半に見えへん。元気やな。研究熱心で立派な人やな」と感心しながら話していた。奥田先輩、いつまでもお元気で活躍ください。

（参考：2005 年 10 月北星社発行 甲斐俊作氏著書「街の灯」に奥田さんが登場しています）

栽培果樹の種類

樹種	本数	樹種	本数
梅	3	ザクロ	1
桃	2	栗	4
りんご	6	柑橘	1
梨	2	ナツメ	2
柿	15	イチジク	5
キュウイ	2	ビワ	2
ブドウ	3		



海外旅行の行き先

年	行き先	年	行き先
7	ドイツ、フランス	17	ロシア
	スイス、オーストリア	19	台湾
8	イタリア、ギリシア	20	韓国
11	台湾	21	中国
12	韓国	22	マレーシア、シンガ
13	中国		ポール
14	タイ	23	インド
15	ベトナム、カンボジア	24	アメリカ西海岸
16	中国		



果樹園で一休み



自慢の巨峰とピオーネ

住民の力で集落を活性化に



黒枝豆の選別作業中の長尾輝夫さん

秋晴れの10月7日、京都との県境にある標高300メートルの分水嶺の地、農作物は篠山市内で最高級と評判の藤坂集落にお住まいの長尾輝夫さん（24期生）を取材しました。この日が出荷日だったのか長尾さんと奥さんが忙しく黒枝豆の選別、荷造り作業をされていました。

現在、集落で離農した農家の農地45アールを引受け、計130アールの農地で水稻（コシヒカリ）80アール、黒豆20アール、栗30本、山椒20本など篠山特産物を栽培し、当集落で最も大規模に農業を営まれています。栽培した農作物の多くは「丹波ささやま農協」に出荷し、黒枝豆の一部は集落の人、親戚、友人に頼まれて全国各地に送られています。農繁期などで農作業がピークの時には奥さんが手伝い、それ以外の時には実質一人で農業をしておられます。しかし、「中山間地での農業はこれが限界である」と一人農業の厳しさもあるようです。4月から12月までは休みなしの農作業があり、さらに1月から3月までは冬場にあった農作業も沢山あります。デカンショ節のように「半年や寝て暮らせ」となれば結構な話ではありますが、「年中暇なし」とは一人農業の現実かもしれません。

長尾さんは、昭和44年3月に鯉淵学園協同組合科を卒業されました。学生時代は、パチンコ、お酒、魚釣り、ドライブと遊んでばかりで勉強はしなかったそうです。しかし、2年間の学生生活で恩師（故）宮島先生から教えていただいたこと、寮生活で全国に多くの友人ができたことが大きな財産であると話されていました。卒業後の4月に兵庫県農協中央会に就職し、農協の監査、役職員教育関係の業務に長く従事され、平成14年6月から「丹波ひかみ農協」で4年間、常勤監事を務められました。特に中央会の勤務時代を振り返り「鯉淵出身の3人の先輩（加藤さん、近本さん、柴垣さん）には随分お世話になり大変感謝している」と懐かしく話されていました。

農業経営を始めた動機は、「亡くなった父の後を引き継ぐことになったことと、人に使われて仕事をしなく、のんびりと農業をしながら暮らそうと思ったから」と話され、今ではその農業に熱が入りすぎたと

反省もしておられました。

当集落においては、高齢化・過疎化が進み、高齢化率が47%と限界集落に近づき、集落の荒廃から守り活性化していく対策が求められています。そのような状況下で今年から自治会長に就任されました。故郷の藤坂に帰って間がなく、また集落の役員経験も少ない中で自治会長として身も心も休まる時がないほど多忙な日々を送られています。

集落の活性化に向け「新規就農希望者への支援」「都市の若者との交流」「空き家の有効活用」など対策を考えてみるが、いざ実践となると相当な知恵と行動が求められ思うようには取り組めないとのこと。しかし、「集落機能が弱体していく中で、住民の協力の心が目覚め『一人は万人のために 万人は一人のために』となることを信じて活動に取り組んでいきたい」と話されました。

今後の抱負として、「当面、一人農業と集落の活性化に取り組むが、年のせいか体が悲鳴をあげているので、将来はゆとりある生活に切り替え、妻と旅行などして老後を楽しみたい」と話されていました。また以前はゴルフを趣味としていたが、今ではゴルフクラブをクワに持ち替え、農業を趣味としているので、集落の人からは趣味の領域を超えていると言われているそうです。

最後に同窓生の皆さんに対して一言をお願いすると、「四季折々に美味しい農作物が実る篠山市藤坂にぜひお越しください」「黒枝豆のご注文を承りますので連絡してください」と話しておられました。我が家では、長尾さんのコシヒカリと黒枝豆が美味しくて、すっかり味ファンになっています。長尾先輩、健康に気をつけて一人農業と集落の活性化に頑張ってください。



広い黒豆畑で収穫作業中

編集後記（平成25年11月）

第3号の支部だよりができました。「頑張っています！同窓生」は3人の先輩に登場していただきました。支部だよりの評判がいいので、回数を増やすか、またはページ数を増やすかを検討していますが、併せて経費も増えるのが悩みです。

同窓生の皆さん、支部だよりを充実するために、今後とも執筆・取材のご協力とご意見・ご感想をお寄せください。向寒の候、どうかお体をご自愛ください。

編集者：福井寛行（26期）